

日清戦争以後百年

獨協大学教授

中村 榮

ただいまご紹介いただきました獨協大学の中村でございます。いま大原教授からお話がありましたように、今年はいまちょうど日清戦争百年にあたります。それに関する話をせよということでしたので、このようなテーマにさせていただきました。できました。本日は日清戦争の意義、それはどういう戦争と考えるべきなのか、それから日清戦争の結果、それが東亞にどういう影響を及ぼしたかという面に焦点を絞って、約一時間話をさせていただきます。

だいたい戦争といいますが、日露戦争が非常に人気があります、その陰に隠れていた感のある日清戦争が、今年百年ということで、多少の脚光を浴びて、日清戦争に関する本なども出ております。マスコミ報道もこれを若干扱っております。ご覧になった方がおいでになるかもしれませんが、今年の七月二十三日、NHKの「ニュース7」で、日清戦争のことを扱ってありました。ニュースの項目はだいたい三十秒から一分ぐらいなのですが、この日清戦争については数分間扱ってありました。あの時間のニュースを数分間扱うということは、たいへん長く感ぜられます。

それはどういうニュースであったかと申しますと、某国立大学の名誉教授のNという人が、日清戦争について新しい発見をしたというのです。簡単に言いますと、日清戦争は謀略的に開始された。非常に計画的な謀略によって開始

されたにもかかわらず、それが伏せられていた。それが最近わかった。そして、この日清戦争はその後の日本のアジア侵略戦争の第一歩である。概略はそういうことでもあります。

満洲事変がアジア侵略の第一歩であるということは、保守派の論客などもよく言うことでありますが、このN教授は日清戦争から始まっているのだということを言っているのです。どういふことであるかということは後ほどふれたと思います。これも非常に納得できないことでありまして、日清、日露が日本の侵略の始まりであるというのは非常に極端な説といわざるをえません。

昭和十年代に記紀の研究で問題を投げた津田左右吉氏が、昭和二十五年に『必然・偶然・自由』という本を出されました。私は学生時代だったのですが、それを買って読みました。それは歴史における必然、偶然、自由とは何かということ論じたものです。そのなかで、記紀に関する新しい研究で非常に問題を投げかけて、その書物が発禁になった。津田左右吉氏がこういうことを言っております。

「戦後の学者の中には大東亜戦争が日清戦争から始まると言っているものがある。しかし、それは誤りだ。日露、日露の二つの戦役そのものは決して帝国主義的または侵略的性質のものではなく、大東亜戦争の準備でも前段階でもなかったのである。世界の列国はみなこの戦役とその成果とに大なる意味のあることを認め、日本の世界における地位がそれによって高められ、国際的ないろいろな仕事に参加するようになり、日本の文化もそれに伴って発達したことは明らかな事実である」と言っているのです。

「そのころまだ弱小国の地位にあつて、絶えず強大国の圧迫を受けていた日本は、帝国主義とか、侵略的だとかいう態度をとる力もなく、欲求もなかった。戦争はこの圧迫に対する命がけの反発であつた」というふうに、津田さんははっきりと昭和二十五年の段階において書いておられます。進歩的といわれた津田左右吉が論じていることは、歴史というものはさかのぼって因果関係があるように見えるからといって、それが必然的に発展したものであると考

るのは誤りだ。大東亜戦争からずっと原因をたどっていくと、日清戦争に行き着く。だから、日清戦争の時にすでに大東亜戦争の準備とか計画があつて、必然的に日清、日露戦争から今回の大東亜戦争が生まれたのであるという論を立て方は間違つていゝるというわけです。

いまから振り返つて必然的に見えても、それは決して必然ではない。歴史には人間の意思も働くし、自由がある。偶然もあるということです。すなわち、Aということがあつて、それからずっと因果関係を踏んでBということが起きた。そうしてみると、BはAから必然的に生まれたように考えがちであります。したがつて、日清、日露が必然的に大東亜戦争に至つたというふうに見えるのでありますが、これはきわめて大きな誤りだと思ひます。

つまり、AからBに發展する過程がいくつもあるわけです。その過程ごとにかくさんの選択肢があるはずで、その選択肢のなかの一つを歴史は選んできたわけです。その選択肢を選ぶといふのは、いろいろな選び方があつた。どれを選んだらどうなるかといふのは歴史の当事者にはわからなかつたのです。しかし、それを選んだ。それがまた次の選択肢を生んだのです。そのようにして選んできた結果がBに至つたわけです。ですから、AからBに至る間にはかくさんの意思が働いていたし、偶然も働いていたわけです。

ですから、日清戦争から日露戦争、満洲事変、支那事変を経て大東亜戦争に至る歴史の中でもかくさんの段階があつたわけで、そこで意思決定をしてきたのは、日本だけではないのであります。ロシアも意思決定にあずかつてきたし、朝鮮もアメリカもイギリスも支那もみんな意思決定にあずかつてきた。それが歴史をつくりあげてきた。ですから、ずっとさかのほつて、これは必然的な経過であると言ふことはできないのであります。歴史といふものは非常に偶然によつて支配される、人間の自由な意思決定によつて支配される要素もあるといふことを考えなければならぬと思ひます。

津田さんはそういうことをおっしゃつてゐるのです。日清戦争、日露戦争の時にはそれなりの主張で日本は動いた

けれども、それは決して大東亜戦争の前段階でもなければ、必然的に大東亜戦争を結果するものでもなかったということ、昭和二十五年の段階である津田左右吉さんがこういうふうに言っています。ですから、津田さんは一般の進歩的な学者とはだいぶ違った学者であると考えるわけです。

さて、日清戦争とはどういう戦争なのか。これは先ほど宮司のほうからお話がありましたけれども、最近言われておりますように、大東亜戦争の始まりである、日本の侵略戦争の始まりであるというふうに見えるべきなのか。私はそのように政治的に考えるべきではないと思います。日清戦争とは一体どういう意義をもった戦争なのか。

簡単に申しますと、これは新と旧との対立だろうと思うのです。新しいものが古いものに取って代わる、その過程でどうしても起こらなければならなかった戦争が、日清戦争だろうと思います。つまり、近代化を目指す日本と、古代的な遺制を残し古代遺制にしがみつこうとする朝鮮、支那との戦いであった。近代と古代との戦いが日清戦争の基本的な意義だろうと思うのであります。

この日清戦争があつたがゆえに東アジア、具体的には朝鮮と中国ですが、これが近代化に向かつて初めて動きだしたわけです。初めてスタートを与えられたのです。日清戦争がなければ、このような始動を与えるものはなにもなかったのです。日本がその始動を行ったと言えらると思います。つまり、アジア近代化への端緒であり、また契機でもあつた。ここに日清戦争の最大の意味を求めなければならぬ。

では、朝鮮の近代化を阻害してきた原因は何であるかということを考えてみますと、これは二、三考えることができます。一つは支那です。当時は清国ですが、清国の古さというか、事大主義、中華思想。あくまでも朝鮮を属国の位置にとどめておこうとする。そして、自分は中華帝国、朝鮮は小中華としてこれを朝貢国の位置にとどめておこうとする中国の中華思想がもちろん背後にあるわけです。

それから、そのような地位に甘んじようとする朝鮮があります。朝鮮自身がそうであった。それは朝鮮の社会、朝

鮮の人間の生活、政治、全般が古かったのであります。そして、生活、社会、政治だけではなくて、朝鮮人の思想そのものが古さを脱することができなかつたということです。古い思想にしがみついていた。古いものがよい。そういう思想に全朝鮮が覆われていたわけです。

つまり、朝鮮自身のどうしようもない古さというものがあつたわけで、それを指摘せざるをえないのであります。当時の朝鮮は、日本でいえば中世であつたと言ふ人もいますが、いや、もつと古い、藤原時代だつたと言ふ人もあります。平安時代の初めであつたということですから、日本から比べますと、一千年も遅れていた。いろいろなことを考えますと、たしかにそれは当たつていないことではありません。つまり、朝鮮自身の古さを指摘せざるをえない。

もう一つはロシアです。ロシアが朝鮮に非常に大きな影を投げかけていました。ロシアは朝鮮を侵略の対象としておりました。それは日清戦争の後の日露戦争を考えてみればおわかりになります。ロシアはアジアに不凍港を求めていた。そして、アジアを侵略しようとしていた。満洲、北支、朝鮮です。一つ間違えば、わが国もその対象になりえたのです。よく日本の侵略ということが言われますが、百歩譲つて日本がアジアを侵略したという説を認めるにしても、ロシアのアジア侵略は日本のアジア侵略とはまるつきり違つていました。

ロシアの関心は単に領土的に侵略することだけだったのでありまして、侵略の対象国を近代化させよう、いい国にしよう、政治を改善しようなどという関心は全くなかつたのです。ただ侵略する。ロシア自身が古かつた。ロシア自身が進歩のない国だつた。したがつて、自分の侵略の対象国を進歩した国にしよう、向上させようなどということは、ロシア人の念頭にはなかつたのであります。むしろ朝鮮が近代的な国になつたら、ロシアは困つたのです。ですから、朝鮮は単なる侵略の対象だつた。

こういうことが朝鮮の近代化を阻害する大きな原因になっていました。ですから、当時アジアにおいて朝鮮の近代

化に関心をもつていた国は、わが日本においてほかになかったのです。支那にしても、朝鮮が近代化してしまつては困る。自分自身が古い国ですから、朝鮮が近代化しては困るし、そんなことは断じて許すことはできなかった。ロシアもいま申したとおりです。そして朝鮮自身、繰り返しますけれども、近代化というものを毛嫌ひした。朝鮮は生活面も遅れていたし、思想の面においても遅れていた。

わが日本のみが朝鮮の近代化を考えた。そして、それを願つたのです。それが帝国主義であるときよくいわれます。たとえば日本が朝鮮に鉄道とか電信とか釜山の利権を求めたことは事実です。しかし、百パーセント博愛主義の対外行動をとる国というのはありませんから、日本が朝鮮の近代化と同時に、わが国の利権もそこに扶植しようと考えたことは事実です。しかし、それは日清戦争の時には実現しておりません。それが実現するのは日露戦争の後です。

日本自身の利益を図つたことはありますけれども、ロシアと違ふところは、日本は自国の利益を図るのみでなく、朝鮮の近代化、進歩、向上も同時に誠実に考えた。これが日本の朝鮮に対する態度の際立つた特徴であります。ですから、わが日本が朝鮮の隣にいたということは、朝鮮にとつてはきわめてありがたかつたことであると言わなければならぬわけです。わが日本がなければ、朝鮮の近代化をスタートさせるものは一つもなかつたのです。

そういうことを考えますと、朝鮮の近代化、独立のためには、どうしても日本は清国と戦争をするほかなかつたのです。日清戦争というものはアジアが近代化へ進むにはどうしても通り抜けなければならぬ、避けることのできない一つの階梯だつたと言つていいと思います。これがなければ、絶対に朝鮮は動かなかつた。それは、中国がその上にのしかかつており、ロシアがあつたからです。その力を打ち破る勢力が、どうしても朝鮮あるいは中国が前進するために必要だつたのです。つまり、日清戦争のほかに朝鮮の近代化と独立への道はなかつたということです。

ですから、当時の日本の外務大臣陸奥宗光は清国と開戦するために、非常に積極的な行動をとります。これは今や紛れもない事実であります。陸奥はご承知のとおり、『蹇蹇録』という自分の外交記録を残しております、これ

は昭和の初めから公表されております。今日私が持つてまいりましたのは、昭和十六年に刊行された岩波文庫版です。ここではつきりと陸奥は、朝鮮問題を解決するには大雨を降らせなければだめだ。そして、その後晴れるかどうか、それを測るための一大晴雨計にしなければならぬと言つております。自分が任命した大鳥という朝鮮公使がいます。この大鳥公使に対して積極的に戦争開始をしろ、どんな口実を設けてもいいから、清国との開戦を図れということをはつきりと言明しておりますし、自分がそのような指示を与えたことをちゃんと公表しているのです。

日本のこのような積極政策に対しては実に大きな危険が伴つたことは事実です。それは、先ほど言いましたようにロシアがありました。それからイギリスもあつた。このロシアとイギリスからの干渉を日本は非常に気にしたのですが、あえて日本は思い切つて危ない外交の綱渡りをしたのであります。

日本が朝鮮から撤兵しなければ、その責任は日本にあるというロシアからの強い干渉があつたのは、明治二十七年の六月下旬であります。二度にわたつて行われたのでありますが、その時に伊藤首相を伊皿子の屋敷に陸奥外務大臣が訪れまして、いまはロシアの干渉を排してもやらなければならぬといつて、日本の国策を遂行することを誓ひ合つた伊皿子会談は有名です。そこに日本の苦悩もあつたし、また、妥協もないわけではなかつたのです。陸奥自身のこと、こういうことを書いています。

「仮設（たとひ）我が軍が牙山にある清軍を進撃するにも必ず韓廷の委託を俟たざるべからず。而して韓廷をしてこの委託をなさしむるに至る前に、我れは先ず強力を以て韓廷に迫りわが意に屈従せしめざるべからず、酷にいえば先ず朝鮮国王を我が手中に置かざるべからず、かくの如き急激の行為は大いに我が国が朝鮮の自主独立を確認すといふ素論と逕庭し、到底何人の同情をも得べきに非ず、といふ如き議論にして、その言の一々至当なるは余といえども敢えて異議を容るる能わざれども、さりとてこの切迫なる間際において復他の良策を案出するものなく、かつ、余はさきに大鳥公使に向かい、『今は断然たる処置を施すの必要あり。何らの口実を使用するも差支えなし。実際の運動

を始むべし』と電訓したり。同公使は最早何らの口実を扱ぶもまた全く彼の自由に属するを以て、彼は既に自ら相当なりと信ずる方針を實行したるやも計られず。云々」。

朝鮮の牙山というところに清国の軍隊が出ていた。日本はそれを何とか排除したいわけです。しかし、そういうことをすれば、日本が朝鮮の独立を守ると言っていた約束と違うじゃないかという非難がある。ところが、陸奥は大鳥公使に対してどんな口実を設けてもいいから、清国と開戦せよと言っている。清国と開戦するためには、朝鮮に入っている清国の軍隊を駆逐しなければならぬ。しかし、それを駆逐するには向こうは朝鮮国王からの要請で入っているというかたちをとっていますので、日本も朝鮮国王の要請が必要だ。そのためには朝鮮国王を日本の手中におかざるをえないのだとはっきり言っているのです。これぐらいの決意をもって、陸奥は日清戦争を始めたのであります。

さて、先ほどNHKの話をいたしました。NHKのニュースでN教授はこういう新発見をしたのであります。日清戦争は明治二十七年の七月二十五日、例の東郷さんがまだ若いころ浪速の艦長をしていた時に高陞号事件というのがありまして、あれも同じ日に起こったのですが、豊島沖海戦をもって始まったと言われているが、そうではない。これは二日前の七月二十三日に始まっているとあって、NHKの七月二十三日はそのニュースを流した。実は百年前の今日この日であるというパフォーマンスをしたわけです。

それはどういうことか。日清戦争には参謀本部の日清戦史という公刊戦史があります。この参謀本部の公刊戦史には、七月二十三日、つまり、二十五日の二日前に朝鮮王宮に日本軍が入った、それは日本軍が王宮のそばを進行していたら、向こうから撃ってきたので、それと撃ち合いになって、偶発的に戦争が起きて入ったのだというふうに書いてあるというわけです。

ところが最近、福島県のある図書館で資料が見つかった。それは公刊戦史の原稿であるというわけです。これはもちろんその先生が見つけたわけではないでしょう。図書館の人が見つけてN教授に知らせたのだらうと思います。そ

の原稿には、朝鮮王宮に日本軍が乱入するのは計画的なことである、そこには国王を虜にしなければならぬとまで書いてある。それが印刷の段階になったときに、その部分が削られてしまったというわけです。そして、公刊戦史には計画的であった、謀略であるという部分はなく、いかにも偶発というふうになっている。このようなごまかしで日本の歴史が始まっているとN教授は言うわけです。これをNHKは新発見として今年の七月二十三日の七時のニュースで伝えました。

このニュースは朝鮮側にもたいへん人気があったようです。朝鮮総連が出している「朝鮮時報」という新聞がありますが、その七月二十八日号の文化面にこれは大きく取り上げられています。NHKと北朝鮮はどういう関係があるのかわかりませんが、非常にタイミングよく、八月一日夜十時からの「視点・論点」という十分間の評論番組にそのN教授が登場いたしました。自分の新発見なるものを自画自賛したのです。そして、日本のアジア侵略は日清戦争の時に始まった、こういう欺瞞的なり方で日本は朝鮮に進出したのだということを言っているのです。

しかし、これは私に言わせれば少しも新発見ではないのです。先ほど申しましたように、戦争を指導した陸奥宗光が『蹇蹇録』で、どんな口実を設けてもいいから清国と衝突するきっかけをつくれ、そして、朝鮮に入っている清国軍を追い払うには朝鮮国王の要請が必要だから、朝鮮国王をわが手中におかなければならない。こういうことをはっきり自分が指示したということ公表しているのです。ですから、公刊戦史の原稿で書いてあることはなにも新しいことではないのであります。

公刊戦史が原稿から印刷に付されるときに、自分にとって都合の悪いところが除去されるということはよくあることです。自分の軍隊にとって都合の悪いことまで何もかも全部あからさまに出すような戦史はほとんどありません。ですから、印刷された公刊戦史に謀略部分が偶発と書かれているといっても、これはさほどメクジラを立てる問題ではないと思うのです。ましてや、NHKが数分間を費やしてビッグニュースとして扱うべき問題でもなんでもないの

です。

NHKが全く不勉強だからこういうことになるわけです。

私がいま申し上げましたことは、日清戦争は日本としてはどうしてもやらざるをえなかった。朝鮮問題を解決するためには、清国との戦争は避けることができなかったということです。そして、この戦争があつて初めてアジアは近代化に向かつて動きだした。この戦争がなければ、アジアは動かなかつたのです。ここに日清戦争の基本的な意義を見いだすことができようかと思ひます。

もう一つは、次のようなことも考えなければならぬ。それは、日清戦争が朝鮮に独立への千載一遇のチャンスを与えたことです。これは独立に向かつての実に大きなチャンスであつた。好機であつたということです。といひますのは、日清戦争で日本が清国を海に陸に打ち破つた。つまり、清国は敗退したわけです。そして、下関条約の第一条において、清国は日本の要請に基づいて朝鮮が独立国であるということ承認したのであります。五百年続いた清国と朝鮮との間の朝貢外交がここにきれいにきつぱりと終わりを告げたということです。つまり、朝鮮を覆つていた清の圧力が日本の勝利によつて取り除かれたのです。まさに朝鮮は清国の影から完全に自由になつた。これが第一です。

もう一つは、日本が朝鮮の内政改革を清国と共同してやろうと言つて、清国がこれを拒否したということが、日清戦争を始めた一つの大きな理由ですが、日本は戦争を始めますと、ただちに朝鮮の改革に手をつけます。当時が甲午の年ですから、甲午の改革といひますが、これを日本は断行するのです。これは実に近代的な改革であります。二百数項目ありますが、これが朝鮮の軍国機務処というところによつて実行されます。

これは本当にたくさんありまして、枚挙にいとまがありませんが、朝鮮の古いものをすべて近代化しようというのであります。たとえば人身売買を禁止するとか、苛酷な刑罰をやめるとか、官吏の綱紀を肅清するとか、人材登用の道を開くとか、たくさんあります。日本がちょうど明治維新をやつたのと同じように、朝鮮に近代的な改革を導入す

るわけです。

日清戦争が終わりますと、日本は朝鮮に対して不干渉政策をとります。当時、列国が朝鮮に非常に注目していたというところもありますが、朝鮮不干渉政策をとる。そして、朝鮮は自立せしむるといふ方針をとります。日本も朝鮮干渉から手を引き、朝鮮を自立の方向に向かって進めよう。そして、いま申しましたように甲午の改革を日本が教えるわけです。朝鮮は初めて近代化というものを知ったのです。近代化というのはこういうものなのかということを目の当たりにしたわけです。ですから、日清戦争の終わった後というのは、朝鮮にとっては独立するための絶好のチャンスだった。清国という圧力もない。それから近代化へも一歩踏み出した。甲午の改革もスタートした。日本も干渉政策を廃止した。独立のためには最良の機会だったのでありますが、朝鮮はこの機会を生かすことを知らなかったのです。

さまざまの内訌、派閥争いでせっかく日本がスタートさせた甲午の改革をつぶしてしまった。これはまことに残念でありました。結局、朝鮮は後戻りしてしまった。このことは当時、朝鮮にいた外国人が次のように言っております。一人はイギリスの有名な女性の旅行家でイサベラ・バード、あるいはバード・ビショップとも言われていますが、紀行文を書いております。これはずっと昔に出た本で、『三十年前の朝鮮』という本です。

「日本が勢力を張った時代に企てた悪政の改革事業は、日と共に閉却せられ、国礎安定を欠き、宮内大臣その他の寵臣が再び君寵を笠に着て、地位を利用して破廉恥な利欲にふけることになった。国王ご自身もまた常に職員録を懐にしてお手元金の蓄積に抜け目あらせられなかった。日本その他の掣肘を離れて陛下は旧慣に返り、専制君主におなりあそばした。論言即ち法律、君意即ち絶対の世の中となった。かつて公道に基づき進歩の階梯をたどっていた日本勢力時代の政策に比し、惜しいかな、ことごとく反対の方面に万事が逆転している。李朝時代の悪習は再び芽を吹き返したのである」。

当時の朝鮮を見たバード・ピショップはこういうふうに書いています。彼女は李朝の王宮にも出入りできた人でありまして、のちに殺された閔妃とも直接話をしていた人ですから、当時の実情を実によく知っています。それが日本の改革が朝鮮人自身の怠慢によって否定されていくのを、このように嘆いているのです。

「日本政府と朝鮮とは一衣帯水の關係にあつて、内政改革より受くる影響の甚深なる旨を繰返し声明した。かくの如き利害關係ある日本は誠意をもつて事にあたり、特権階級の急所に触れ、社会的秩序に變動をもたらした。日本は過去の経験に乏しい。改革手段が多少乱暴に過ぎて無用の敵愾心をそそりだしたかもしれないが、私は日本の誠意、熱心を疑わない。日本は決して野心を包蔵してはいない。朝鮮の師となり友となり独立の補佐役たる役目を忠実に果たしているにすぎない。多少の過失は日本にあつたかもしれないが、日本は一年以上も善良なる先達となつて朝鮮を導き、いろいろ有効かつ必要な改革を行い、その他にも計画するところがあつた。今日着々行う所は実に日本が予め引きたる線上を歩むに外ならぬ。ロシアが代わつて日本の勢力を奪うや、日本の顧問官、監督官、陸軍教官および軍隊は本国に引き揚げ、なるに任せよ行くに任せよの政治が始まつた。その実は朝鮮がなるがままに乱れ、行くがままに滅びるのが、野心あるロシアの腹の中であつたのだ。ロシア勢力時代が継続すれば、その魔手が遠からずして朝鮮に延びてくるのは無論である」。

こういうふうには日本が敗退してロシアが朝鮮に入つてくることを彼女は危惧しているのです。

やはり日清戦争の終わった翌年、朝鮮を訪れた有名なイギリスの政治家カーゾンという人がおります。そのカーゾン卿は日清戦争後の朝鮮のさまを見て、こう書いております。

「もし日本が日清戦争の後、自由に朝鮮を併合し思いどおりに処置することができたとすれば、日本は早晩、当時存在した朝鮮の混乱の中から新しい秩序を發展せしめたかもしれない。だが、日本は自分自身が行つた朝鮮は独立国であるという誓約と他国への危惧のため、それはできなかったのである。朝鮮という氣違ひじみた小舟を極東の停泊

地に曲がりなりにも係留していたたつた一本の綱を、日本は断ち切つてしまった。(つまり、朝鮮を自由にしてしまった。)日本はこの小舟が舵手も舵もなく、荒れた海の上を漂うままに任せてしまつたのである」。

このように見ていたのであります。つまり、日本は日清戦争で朝鮮を併合すべきであつた。ところが日本は朝鮮の独立を認めると言つてしまつたので、その言葉に日本は忠実であらうとしたために、朝鮮はなるに任せる国になつてしまつたと言つて、カーゾン卿はむしろ日本が朝鮮を自立せしめる方針をとつたことを嘆いてゐるのです。これが當時の朝鮮の状況であつたということです。

普通ならば、ここで独立ということが行われるわけです。独立運動家というものが出て、朝鮮の独立、近代化を唱え、そして、国民を引張つていって、独立をやるのですが、朝鮮にはそういうエネルギーがなかつた。多少の独立運動はその後生まれましたけれども、全国民のエネルギーをまとめあげるような人物もいなかったのです。そして、ひたすら内訌、内輪争いをしたのです。わが日本が幕末の危機の時にお互いに内輪争いをやめて、明治維新を遂げたというのとはまるつきり違つた道をとるようになった。これが結局、朝鮮が独立の最もいい機会を失うことになつた原因です。これは朝鮮の責任だろうと思ひます。独立にはチャンスがあります。機会があります。その機会を逃してしまつたのは、朝鮮人自身の責任といわざるをえない。その反省がなくてはいけないと思ひます。

日本がアジアにかかわつていった、そのかわり方は非常に武断的であつて侵略的であつたとよくいわれます。しかし、これについても私は異論があります。

確かに日本は武の原理をアジアに対して用いたことはあります。しかし、日本がアジアに対して用いた武の原理は、西欧の国々がアジアに対して用いた武の原理とは根本的に違つたものがある。そのところを見なくてはいけないと思ひます。たとえばイギリス、オランダ、ロシア、アメリカ、これはいずれも武の原理をもつてアジアに臨んだ。植民地をつくつたわけです。イギリスのインド支配、オランダのインドネシア支配、ロシアの様々な国の支配、米国の

ハワイ占領、ハワイ併合といったものすべて、武力によってなされたわけです。

阿片戦争は、一方において清国の尊傲が原因として挙げられますが、他方において、イギリスの阿片、それから砲艦外交があります。それからペリーの日本開国にしても、これは、純然たる砲艦外交といわざるをえない。それに比べまして、わが国の朝鮮に対する対応は決して武一点張りではないのです。明治の初期に日本が朝鮮に対して修好提議をした。それを見ても、そこには全く武力を行使した、あるいは武力によって圧力をかけた跡はないのです。全く平和的に話し合いをしようとしたのでありますけれども、朝鮮がこれを拒否し、日本を侮蔑し、釜山に居留する日本人に迫害を加えたために、結局これが紛糾を起こし、そして、例の征韓論を激発せしめたわけです。

征韓論にしても、西郷さんの征韓論はいきなり朝鮮に兵隊を送つてはだめだ。まず最初に朝鮮に使節を派遣して道理というものを朝鮮に説くべきである。朝鮮を説得すべきだ。説得でこれを服従させるべきであるというのが、西郷さんの征韓論だったわけです。

それからの中に江華島事件が起こりまして、その時に日本は武を使ったことは事実です。向こうから撃たれたためにこちらから撃ち返して、江華島の砲台を占領し、向こうの武器を奪った。そして翌年、江華島条約、日鮮修好条規とも申しますが、これを締結いたしました。明治九年であります。

この時に日本は、こういう武力衝突で始まった紛争を解決する善後条約であるにもかかわらず、朝鮮に対して領土的な要求はこれっぽっちもしないのです。寸土の要求もしていません。江華島だけでも要求すればよかったように思いますが、それも要求していません。のみならず、江華島条約の第一条において、朝鮮は自主の国であるということをはっきりと認めております。つまり、世界で初めて日本が朝鮮は独立国であることを認めた国なのです。

また、江華島条約の付属取り決めとありますが、その付属取り決めのなかで日本は朝鮮と初めて経済的な取り組めを結ぶのですが、その中で朝鮮において日本人は阿片の販売をしてはならないと厳禁しています。これはイ

ギリスが阿片を売り込もうとして戦争をしたのとはまるっきり逆の仕方です。たしかに同じように武は使ったけれども、日本人は朝鮮に阿片を売ってはならないということをはっきりと条約のなかで明文化したわけですから、明治十五年に壬午事変というのが起きまして、日本人が朝鮮の反日事大党から虐殺されるという事件が起きます。この壬午事変の後、日本は済物浦条約を結びますが、この条約で日本は朝鮮から当時五十万円の賠償金を取るのですが、向こうがこれを年賦払いにしてくれと言うので、十年の年賦払いにしてやる。のみならず、日本は朝鮮が十万円払った段階で、残りの四十万円で朝鮮の内政改革にあてよといつて、これを全部返還します。つまり、日本が取るのではなくて、朝鮮の内政改革がいちばん大事だから、その資金にしなさいといつて、四十万円、八割の賠償金を朝鮮に返上します。さらに、汽艇一隻と大砲を二門、朝鮮に贈っております。

もし日本が朝鮮を侵略しようという野心があるならば、その侵略の対象国に武器を贈るわけなどないのです。その相手国の内政改革のために金を出すなどということはないのであります。こういうことを見ましても、日本が朝鮮に対して、後に支那に対して、武の原理によつたことは確かにありますが、しかし、それは西洋諸国がアジアの植民地に対して武力を行使したのとは非常に違つた趣があるといふことを申し上げたいのです。

つまり西洋の国はアジアの国を異民族と考へていた。異民族を支配するのに動物を支配するように支配したわけです。しかし、日本は朝鮮を異民族とは考へていなかった。むしろ兄弟のような気持ちをもつていた。兄弟的な同胞愛という気持ちをもつていたと思ふのです。ですから、朝鮮、後には支那に対しても武力を行使したことはありますけれども、それはやむをえなく武力を使ったわけで、いうならば、どうしようもない兄弟を何とか誘掖しようとするのだけれども、どうしても言うことを聞かないので、しかたなく打擲する。一方において誘掖しながら、時に打擲するというかたちが、日本のアジアに対する武の原理ではなかつたかと思ふのです。

日本人の中国人あるいは朝鮮人に対する気持ちのなかには、同胞的な気持ちが最後まであつたと思ひます。今日の

テーマではありませんが、後には日本が朝鮮を併合してから三十五年間の総督政治を布くわけですが、朝鮮人はこれを史上類例のない悪政のごとく言っております。日帝三十六年の植民地支配、これは史上類例のない暗黒政治だと言っておりますが、私の調べたかぎりではとてもとてもそんなものではない。実にすばらしいことをたくさん日本人はやっております。決して朝鮮人を奴隷視したことはありません。

バード・ビショップも言っておりますように、一部に心ないことはあったかもしれませんが、日本の朝鮮統治の根本方針としてそれをやったわけではないのです。根本方針はあくまでも朝鮮を一視同仁、内鮮融和、内鮮一体という気持ちで導いていく。そして、日本人と同じ地位にまで高めていくというのが、日本の統治政策の根本だったように思っております。しかし、それは今日のテーマではありません。

さて、日清戦争の大団円は、言うまでもなく三国干渉でした。三国干渉で、日本の勝利の喜びもとたんに地に落ちたわけです。三国干渉が日本人に対して実に大きな衝撃を与えたことはたくさん例があります。平民主義者であった徳富蘇峰が一転して国家主義者になったのも、三国干渉が原因であると自分で書いております。非常に大きなショックを与えたわけです。この三国干渉がいかに愚策であったかということは、支那のたいへん有名な歴史家王芸生が書いております。

これ以後、満洲事変に至る東亜の禍乱というものはすべて三国干渉から始まっている。しかも、その三国干渉を導きだしたのは清国の夷を以て夷を制する政策だった。清国がロシア、イギリスに頼ったならば、日本を牽制することができると考えた。実際にはイギリスは入りませんでしたけれども、ロシアに頼り、ドイツに頼り、フランスに頼った。そして、三国干渉であの遼東半島を取り戻した。それが清国に非常に大きな代償を払わせることになり、それがやがて義和団事件を導き日露戦争を導き、やがて満洲事変に至る一線の糸のごとくであると書いておりますけれども、中国自身の歴史家がそのように言っているのです。

そして、朝鮮も朝鮮です。日清戦争の後、日本の勢力が後退した後にロシアを導き入れたわけです。そして、日本が三国干渉で敗れるのを見るや、朝鮮民族というのはだいたい強いものにつきますから、掌を返したように一日して変わります。日本はもういいと、日本がやった改革を全部ご破算にしてロシアに寄る。親露侮日政策をとる。そして、閔妃が勢力を持ってきて日本の勢力を追い払おうとする。

そこで、朝鮮にある親日派と親露派との争いになる。その争いのなかで閔妃殺害事件が起きたのです。やがて、それが日露の対立になっていく。そして、後の日露戦争につながっていくわけです。そういうことを考えますと、朝鮮人自身に先見の明というか、賢明さというものが欠如していたということを指摘せざるをえません。

結論的に申しますと、日清戦争は日本が東亜近代化を始動させた戦争であった。これは先ほど来申してきました。日清戦争がなければ、具体的には朝鮮とか支那の近代化はなかったのです。日清戦争で初めて支那人はなぜ日本が強いのか、なぜ支那が弱いのかということを考え出したわけです。それから支那におけるさまざまな改革運動が芽を吹き出した。それが辛亥革命につながっていくわけです。つまり、東亜の近代化を始動させたのが日清戦争である。

それに対して朝鮮と支那が正しく対応する賢明さを欠いていた。そのような歴史現象に対して、正しく認識し、先見の明をもって対応する知恵がなかったといえますか、賢明さがなかった。それが日清戦争を朝鮮にとっても支那にとっても非常に不幸な結果に終わらせてしまったことになると思うのです。

その結果、日本がやがて義和団事件、日露戦争というふうな、武力をもってアジアに進出していくという結果を招いたことは事実です。そういう面はありますが、いまのようなことをよく考えるならば、その責任の一半は支那にあり朝鮮にあるといわざるをえないのです。もし支那や朝鮮が日清戦争に対して賢明に対応していたならば、日本がその後あのような仕方ではアジアに武力進出するようなことはなかっただろうと考えます。そうすると、責任の一半は朝鮮や支那にもあったという結論になるわけです。

今年は日清戦争百年。左翼の学者は、これが日本のアジア侵略の始まりであると説くわけですが、私はむしろ、韓国や中国が自分たちの歴史責任を反省すべき節目ではないかと考えています。それが彼らにとつての日清戦争百年でなければならぬ。まとまりのない話でしたが、これをもちまして、私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。